

5月19日に、第38回宮城学院同窓会ホームカミングデーが開催されました。実行委員は、高校、大学の当番学年のクラス幹事の方々が担当してくださいます。毎年、知恵をしぼり、工夫を凝らして素晴らしい企画を立ててくださるのが楽しみの一つです。

今年は宮城学院中高で6年間を過ごされた後、文学座、劇団昴に加わり、今も声優、舞台役者、ナレーターとして独自の道を切り拓きつつ活躍しておられる土井美加さんが、仲間の声優宮澤はるなさんと共に、作曲家・編曲家でもある園田容子さんのピアノ伴奏に乗って「音楽語り」を披露してくださいました。

土井さんは、中学1年生の時にシェイクスピアの「テンペスト」を観て、自分も演じたいとの一念に突き動かされ、演劇班に入部されたそうです。なんと当時の演劇班には100名以上の部員がいたとのこと。にわかには信じられない数字ですが1960年代～70年代は、まさに新劇全盛時代であり、それ以外にもアングラ四天王と言われた「天井棧敷」の寺山修司、「状況劇場」の唐十郎、「早稲田小劇場」の鈴木忠志、「黒テント」の佐藤信たちが華々しい活躍を展開していた時代だけに、才気煥発で多感な少女たちが演劇に心惹かれ、憧れたのも当然のことだったのかもしれませんが。

土井さんは、先輩たちから厳しく指導されたそうですが、稽古に集中した甲斐あって中2の文化祭で『アンネの日記』の主演に抜擢されます。その公演後、宣教師の先生から手を握られ、涙ながらに感動を伝えられるのです。その喜びの経験を通して芝居をする事の楽しさを知り、また自分が夢中になれるものが何であるかということに気づかされます。舞台役者、声優として土井さんが今日あるを得ているのは、まぎれもなく宮城学院中高での学び、演劇班経験があればこそと言えるでしょう。

そのことを思いめぐらすにつけ、愛する母校で同窓生を前にして演じられる舞台のために、どれほどの特別な情熱と思いを寄せて備えてくださったことかと思わずにはられません。事実、『ハハの話～ムスメの記憶』と題して演じられた36分ほどの「音楽語り」は、まさにこの日のために土井さん自身が書き下ろされたものでした。

認知症を患っている卒寿の喫茶店主とその義母を支える嫁との対話で舞台は進みます。幼友達、父母と爺や、恋人との出会いと別れ、シャンソンへの熱き思い、そして仙台の地への愛がユーモアとペーソスを込めて演じられ、同窓生一同が懐かしいセピア色の郷愁の思いに誘われる舞台でした。

各地の同窓会を訪ねてつくづく感じ入ることは、いろいろな形でご自身の思いを表現すること、すなわち湧き上がる豊かなイメージを表現へと至らす力のある方が何とたくさんいらっしゃるということかということです。音楽科を卒業された方々はもちろんのことですが、舞踊やバレエ、童話の読み聞かせや紙芝居、アートフラワーや切り絵による絵本作り、ジュエリーデザインなど、有名無名を問わず、実に様々な形でご自身の思いを豊かに表現している方々が大勢いらっしゃることに驚かされ、それはなんと素敵なこと、素晴らしいことだろうと思わされるのです。

すでにご存じの方も多いと存じますが、NHKの朝の連続テレビ小説「なつぞら」は北海道が舞台となっていますが、広瀬すずさんが演じる主人公奥原なつのモデルもまた、宮城学院中高OGで東映動画の草創期から活躍された奥山玲子さんです。元同窓会長の岩井陽子さんとは中高6年間、クラスがご一緒ということで、その思い出が「資料室からのお知らせ」に載せられておりました。

中学校では新学習指導要領が2021年度から全面的に実施され、思考力、判断力、表現力を重んじたカリキュラムへとシフト・チェンジされることになっております。しかしながら同窓生の皆さんとの出会いを持つたびに、もともと宮城学院の教育のなかには、そのことを重んじる伝統があったのだという思いを強くさせられます。しかも、同窓生の多くの演奏、演技、作品には、最も深いところに「愛は、すべてを完成するきずなです」（コロサイの信徒への手紙3章14節）というメッセージが込められていることを感じさせられ、なによりそのことこそがとても貴いこと、喜ぶべきことではないかと思うのです。